

された。ビタミン B1 の経静脈的大量投与により上記症状は速やかに改善した。術後の化学療法時の悪心、嘔吐などの消化器症状に対して高カロリー輸液を併用する際にはビタミン、微量元素などの栄養素補充に対する注意が必要である。

39) 5-FU 投与が原因と考えられた白質脳症の1例

山口 修・千田 匡 (立川総合病院外科)
植木 秀任 (同 脳外科)
福田 光典・小林 勉 (新潟大学第一外科)
山洞 典正 (新潟大学脳研究所)
小柳 清光 (神経病理)

症例は56歳女性。1991年2月20日左乳癌にて非定型的乳房切断術 (Auchincloss 法) を施行。92年12月17日胸部レ線にて多発性肺転移みられたため93年1月12日より3月7日にかけて CAF 療法2クール (総投与量 5-FU 2,000 mg ADM 100 mg EDX 2,800 mg) 施行。3月16日突然の意識レベルの低下、全身痙攣発作発症。脳 CT, MRI にて大脳白質後頭葉に変性を疑う広範な病変を認めた。生検し得た神経病理学的診断では白質脳症であった。髄液検査では異常所見は認められなかった。その後保存的療法にて症状軽快37日後の脳 CT でも陰影の消失が認められた。原因として 5-FU 投与の影響が強く疑われた。

40) 薬剤による間質性肺炎を呈した2例

丸田 智章・三科 武
石原 良・阿部 和男
藤島 丈・加藤 知邦 (鶴岡市立荘内病院)
大谷 哲士・斉藤 博 (外科)

カルバペネム系薬剤によると思われる間質性肺炎を呈した2例を報告いたします。

【症例1】81歳、女性。盲腸癌と診断され、右半結腸切除術を施行された。9病日より微熱、呼吸困難出現し、肺炎を疑われ、チエナムを投与開始された。投与開始後4日目より間質性肺炎像を呈し、徐々に増強、人工呼吸管理、ステロイド剤投与が施行されたが、呼吸状態は改善されず、死亡した。

【症例2】64歳、男性。直腸癌の診断で、低位前方切除術を施行された。9病日に腹壁離開し、手術施行され、同日よりチエナムを投与開始された。投与開始後4日目より間質性肺炎像が出現し、徐々に増強、呼吸困難強く、

人工呼吸管理を行い、ステロイド剤投与を行った。肺炎像は改善され、原疾患も経過良好にて、退院した。薬剤感受性試験 (DLST) を投与した数剤に行ったところ、チエナムのみに反応が認められ、チエナムによる間質性肺炎が考えられた。

41) S状結腸癌術後の腎後性急性腎不全に対し手術、制ガン剤で積極的に加療した1例

宗岡 克樹・佐藤 攻 (信楽園病院外科)
清水 武昭

腸閉塞で発症したS状結腸癌の1症例に Hartmann 手術を施行、10カ月後の人工肛門閉鎖術の際に Schnitzler 転移を認め切除した。術後26カ月目に腹膜播種、小児頭大腫瘍による腎後性急性腎不全となり、経皮的腎瘻造設術を施行した。その後、腫瘍摘出術と CDDP の腹腔内投与を行ない、急性腎不全は治癒した。術後56カ月目に2回目の腎後性急性腎不全となったが、経皮的腎瘻造設術を行った。その後出現した後腹膜膿瘍の経皮的エコー下穿刺ドレナージ術、経静脈的な CDDP 治療により急性腎不全は治癒した。現在外来加療中である。S状結腸癌術後の腹膜播種に対して、手術、腹腔内及び経静脈的な CDDP の投与により、腎後性急性腎不全を治療した1例を経験した。

第47回新潟癌治療研究会演題

日時 平成5年7月3日(土)
午後1時30分より6時まで
会場 新潟東映ホテル
2F朱鷺の間

I. 一般演題

1) 肺転移をきたしながら長期に CR を維持している進行神経芽腫の1幼児例

大沢 義弘・岩渕 眞 (新潟大学小児外科)
浅見 恵子・笹崎 義博 (県立がんセンター)
内海 治郎 (新潟病院小児科)

神経芽腫は小児固形腫瘍の中で最も転移をきたし易い腫瘍であり、病期分類でもリンパ節、骨、眼窩、骨髄、肝、皮膚が転移好発部位として独自に標記されている。しかしながら他の腫瘍でよくみられる肺転移は稀であり、